原 著

出産に立ち会う中で生じる男性の気持ちの 変化に関する質的研究

Qualitative research on the husbands' experiences and feelings before,
during and after of attending childbirth

竹 原 健 二 (Kenji TAKEHARA)*¹
須 藤 茉衣子 (Maiko SUTO)*²

抄 録

背 景

わが国では立ち会い出産に対する認識は広まっている。その一方で、出産に立ち会うことが男性にとって、不安やうつ、トラウマといったメンタルヘル스에悪影響を及ぼす可能性も指摘されつつある。パートナーの出産に立ち会った男性が、分娩開始前から産後までにどのような気持ちになり、どのように気持ちが推移していったのか、ということを経験的に記述することを本研究の目的とした。

方 法

東京都およびその近郊にある2か所の病院において、過去3か月以内に陣痛中から分娩終了までのプロセスに立ち会った男性10人を対象に、半構造化面接を実施した。収集したデータについて、2人の研究者が独立して要約的内容分析をおこなった。

結 果

対象者10人のうち7人は、今回の立ち会い出産が初めての経験であった。対象者は皆、分娩第一期から分娩が終了するまで立ち会った。面接調査によって得られた文脈からは、立ち会った男性の気持ち・想いを表す【妻を支えたい】、【未知の世界に対する不安と恐れ】、【共に立ち向かう】、【男女の違いの気づき】、【成長】という5つのカテゴリーと、それを構成する13のサブカテゴリー、立ち会い出産をした男性の気持ちに影響を及ぼした外的要因として、【影響を及ぼした要因】というカテゴリーと、2つのサブカテゴリーが抽出された。【妻を支えたい】は妊娠期の男性の気持ちや行動を表す文脈によって構成されていた。同様に、【想像がつかない世界】や【共に立ち向かう】、【男女の違いの気づき】は分娩時を表す文脈が中心となり、【成長】は分娩直後や産後の男性の気持ちや行動を表す文脈によって構成されていた。

結 論

本研究の結果から、立ち会い出産に臨む男性の気持ちは出産前から産後にかけて変化していくことが示された。助産師を中心とした医療スタッフは男性の状態も観察し、適切な声掛けや働きかけをおこなっていくことにより、男性の立ち会い出産の体験をよりよくすることができると考えられた。

キーワード：立ち会い出産、妊産婦のパートナー、質的研究

*¹ 独立行政法人国立成育医療研究センター研究所政策科学研究部 (Department of health policy, National Center for Child Health and Development)

*² 津田塾大学大学院国際関係学研究科 (International and Cultural Studies, Tsuda Graduate School)

2014年4月8日受付 2014年9月1日採用

Abstract

Purpose

The presence of husbands at childbirth has been widely accepted in Japan. However, the negative effects of attending childbirth on husbands can include mental health disorders such as symptoms of PTSD, anxiety, and depression. The purpose of this study was to explore husbands' experiences and feelings with attending their partners' childbirths and to describe the transformation process of their feelings before, during, and after childbirth.

Methods

Semi-structured interviews were conducted by a male interviewer. Fourteen Japanese men who had attended their wives' childbirths at two maternal hospitals within the past three months were recruited. Ten agreed to be interviewed and participated in the study from October 2011 to January 2012. Data were collected using an ethnographic approach called the Rapid Assessment Process. Interviews were approximately 90–120 minutes long and were conducted in person at a time and location convenient for participants. Two researchers independently analyzed the qualitative data using content analysis to identify categories and sub-categories of husbands' experiences and feelings before, during, and after attending childbirth.

Results

Seven of ten participants were attending childbirth for the first time. All participants attended the vaginal delivery from the first stage until the end of labor. Five categories consisting of 12 sub-categories emerged as descriptions of the husbands' experiences and feelings: "Wanted to support my wife," "Concerns about unknown world," "Overcame a problem with my wife," "Noticed the differences between men and women," and "Grew up." Two factors—"Responses of the medical staff" and "Appreciation from my wife"—affected the experiences and feelings of the husbands regarding attending childbirth. Furthermore, their feelings shifted as time passed. Specifically, "Wanted to support my wife" was apparent in husbands' feelings and actions during their wives' pregnancy. Categories that were salient during labor were "Concerns about unknown world," "Overcame the problem faced with my wife," and "Noticed the differences between men and women." Finally, "Grew up" was a common theme during the postpartum period. It was demonstrated that experiences and feelings were different between men who had and those who had not attended childbirth previously. Data from four subcategories, including "A feeling of powerlessness" and "Discover a new world," were not extracted from participants who had already attended childbirth.

Conclusion

Husbands' feelings regarding attending childbirth were transformed before, during, and after childbirth. The present findings might help caregivers to better understand husbands' feelings and anxieties, which could facilitate husband involvement in childbirth. Health care providers should incorporate this process in working with husbands involved in childbirth to help husbands as well as childbearing women have a satisfactory childbirth experience.

Key words: attending childbirth, husband, qualitative study

1. 緒 言

わが国では、1980年ごろから立ち会い出産ができる施設が増加し、現在では50%程度に達したとも言われている。近年のイクメンブームの影響もあり、日本では立ち会い出産をする男性が着実に増えてきている。

男性が出産に立ち会うことのメリットについては、多くの研究がおこなわれており、産婦のリラクセスや家族の一体感の形成 (Johnson, 2002; 内藤, 1994)、父親の自覚の獲得や妻子への愛情の変化 (中島・牛之濱, 2007)、子どもへの愛着形成 (Johnson, 2002; Vehvilainen-Julkunen & Liukkonen, 1998) につながるとされている。

一方、立ち会うことによる弊害・デメリット、今後

に改善すべき課題も報告されている。男性は出産に対して「生々しい」、「怖い」といった負のイメージを持っていることや (寺内・野口・久米, 2010, P.75; 青野・高木・笹川他, 2005, P534-535)、立ち会った男性の38.6%が「妻のそばにいても何もできなかった」と感じるなど (青野・高木・笹川他, 2005, P534)、無力感や自己の役割がわからないという者がいると言われている (Johnson, 2002; 中島・牛之濱, 2007)。立ち会い出産がメンタルヘルス不調の原因となったり、産後の夫婦関係の悪化につながることも指摘されている (Hanson, Hunter, Bormann, et al., 2009, P12)。しかし、こうしたリスクについては十分に明らかにされておらず、臨床においても十分に配慮されているとは言いがたい。

これらの先行研究の多くは、分娩の開始から終わりまでを一纏めに「立ち会い出産」として分析がおこなわれており、分娩の過程における男性の気持ちの変化に着目した先行研究は非常に乏しい。国内では岡ら(2006)が5名の男性に聞き取りをおこなった調査があり、海外の研究を見てみても、ネパールでSapkota, Kobayashi, & Takaseら(2012)が実施した調査がある。いずれの論文においても、分娩期に変化する男性の気持ちが示されたものの、妊娠期から産後にかけて、男性の気持ちの変化について、実態を示すような研究は極めて少ない。

助産師と男性の関わりについてもいくつかの研究があり、第一子の父親に対しては、助産師が十分なサポートをすることで、男性の出産体験は良くなることが知られている(Hildingsson, Cederlof, & Widen, 2011, P133-134)。Vehvilainen-Julkunen & Liukkonen (1998, P15-16)が実施した量的研究では、助産師が男性に分娩の進捗状況を伝えることが、疎外感を予防するために重要であることが示されている。また、継続ケアの担い手としても男性が着目されるなど(Sapkota, Kobayashi, & Takase, 2013, P46)、男性が分娩において重要なピースになりつつある。そうした男性の分娩時の気持ちについて把握することで、助産師などのケア提供者は男性に対してより適切な働きかけができるようになるのではないかと考えた。

そこで、本研究では、パートナーの出産に立ち会った男性が、分娩開始前から産後までにどのようなことを考え、どのような気持ちになったのか、どのように気持ちが推移していったのか、ということを示すことを目的とした。

II. 研究方法

1. 対象者

本研究の対象者は2011年10月から翌年1月にかけて、東京都およびその近郊にある2か所の病院において、過去3カ月以内に陣痛中から産後まですべてのプロセスに継続して立ち会った男性とした。この2つの病院は、それぞれの地域の拠点病院である。それぞれの病院の勤務助産師が対象者をリクルートした。対象者の選定基準として、パートナーが経膣分娩をしていること、インタビューを日本語でおこなうため、日本語が十分に話せる者とした。産婦もしくは子どもの健康状態が悪い場合には、リクルートしないように配慮

した。

対象者は助産師から本研究の主旨について文書および口頭で説明を受けた。研究参加への同意が得られた後で、氏名や連絡先などを用紙に記入した。その用紙に記載された14人の情報をもとに、インタビュアーが対象者に電話もしくはEメールにて連絡をとった。

2. データ収集

すべてのインタビューは、これまでも本研究に関連するテーマの研究をおこなってきた男性研究者と1対1で、対象者の都合がよい場所で実施された。多くはパートナーが出産をした病院や職場の近くのカフェなどでおこなわれた。インタビューを始める前に、本研究の主旨について改めて口頭および文書にて説明をし、同意書に署名を得た。

調査はインタビューガイドを用いた半構造化面接によって実施された。インタビューガイドを用いて、①立ち会う前の気持ち、②立ち会った際におこなったこと、③立ち会ってみてよかったと感じたこと、④立ち会ってみてあまりよくなかったと感じたこと、⑤立ち会ったことがその後の自分に及ぼしている影響、主に上記の5つのことについて対象者に尋ねた。

インタビューは90分から120分程度にわたっておこなわれた。インタビューの記録は、インタビュアーがインタビュー中にメモを取り、インタビュー後2時間以内にメモをもとにインタビューの内容を逐語録として文章化した。こうした手法は、Rapid Assessment Process (RAP) として民族学や文化人類学などで広く知られている(Beebe, 2001)。

3. データ解析

データの分析は、トライアンギュレーションを考慮し、インタビュアーを含む2人の研究者が独立して要約的内容分析をおこない、それぞれの解析結果をもとに議論とデータの確認を繰り返して実施された。まず、それぞれの研究者が10人分の逐語録を何度も読み返し、文脈単位でコード名をつけた。それぞれの研究者が抽出したコードについて、分析対象者の立場に立っているか、コードが文脈に含まれる行動や気持ちを適切に表しているか、などを確認しながら、コードを検討した。また、分析をおこなった2人の研究者間で、その文脈の長さやコードのつけ方に相違がないか議論を重ねた。コードをつける際には、その文脈が「1. 妊娠期」、「2. 分娩期」、「3. 娩出直後」、「4. 産後」のどの

ステージにおける気持ちや出来事を表しているか、その“ステージ”も記した。対象者が分娩時のことを思い返して、産後に何か気づきを得たような場合は、「4. 産後」のステージの文脈として扱った。

次にコードの一覧表を作成し、コードが内包する意味や内容をもとに、サブカテゴリーとさらに上位概念であるカテゴリーの抽出を試みた。抽出されたカテゴリーやサブカテゴリーと、コードや個々の文脈そのものの関連性について、下位概念が上位概念に内包されることを目指して、研究者間で協議を重ね、妥当だと判断できるようになるまで、カテゴリー化の作業をやり直した。コードの内容が同じでも指し示す文脈の示す「ステージ」が他のコードと大きく異なる場合は、そのコードが適切に付与されているかを再検討した。

最終的に2人の研究者がいずれも合意できるコードとカテゴリーが抽出された。なお、本研究では、カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを『 』, 文脈の内容が示すステージを「 」で示すこととした。

4. 倫理的配慮

対象者からの研究参加協力に関する同意は、インタビューの開始前に、インタビュアーが本研究への参加は自由であること、途中でいつでも中断できることなどを口頭および文書を用いて説明した上で、同意書に署名を得る方法で確認をした。なお、本研究は独立行政法人国立成育医療研究センターの倫理委員会の承認(受付番号503)を得て実施された。成育医療研究センターの倫理委員会の承認後、調査協力施設においても同様に承認を受けてから実施した。

III. 結 果

1. 対象者の属性

調査への協力について了解が得られた14名のうち、実際に調査が実施できた10名を本研究の対象者とした。4名に対する調査が実施できなかった理由は3名が対象者の多忙、1名が産後に実家に里帰りをしてしまったことであった。対象者10名のうち、初めて出産に立ち会った者が7名、今回が2回目の立ち会いだった者が3名であった。対象者の年齢は30代が8名、40代が2名であった。分娩様式は10名とも経陰分娩で、うち2名は吸引分娩、1名は無痛分娩であった(表1)。

2. カテゴリー・サブカテゴリーに含まれるコードとそのステージ

収集したデータを分析したところ、225の文脈にコードが付与された。そのうち、サブカテゴリーに内包された文脈は203であった。これらの文脈から【妻を支えたい】、【未知の世界に対する不安と恐れ】、【共に立ち向かう】、【男女の違いの気づき】、【成長】という立ち会った男性の気持ち・想いを表す5つのカテゴリーと、それを構成する12のサブカテゴリーが抽出された。また、立ち会い出産をした男性の気持ちに影響を及ぼした外的要因として、【影響を及ぼした要因】というカテゴリーと、2つのサブカテゴリーが抽出された。その他の22の文脈については、カテゴリーやサブカテゴリーに含まれないことや、他に類似の文脈がないことなどの理由によって、分析結果には含めなかった。

これら計6つのカテゴリーと14のサブカテゴリーに含まれるコードの数と、それぞれのカテゴリー・サブカテゴリーの抽出に寄与した対象者の状況は表2のと

表1 対象者の属性

	年齢	立ち会い 出産の経験	立ち会った時期	分娩様式	産科医療 介入の内容	陣痛誘発・ 促進の有無	NICUへの 入院
A	30代	なし	分娩第Ⅰ期～第Ⅳ期	経陰分娩		あり	
B	30代	なし	分娩第Ⅰ期～第Ⅳ期	経陰分娩			
C	30代	なし	分娩第Ⅰ期～第Ⅳ期	経陰分娩			
D	40代	なし	分娩第Ⅰ期～第Ⅳ期	経陰分娩			
E	40代	なし	分娩第Ⅰ期～第Ⅳ期	経陰分娩			
F	30代	なし	分娩第Ⅰ期～第Ⅳ期	経陰分娩	無痛		
G	30代	なし	分娩第Ⅰ期～第Ⅳ期	経陰分娩	吸引		
H	30代	あり(2度目)	分娩第Ⅰ期～第Ⅳ期	経陰分娩		あり	あり
I	30代	あり(2度目)	分娩第Ⅰ期～第Ⅳ期	経陰分娩	吸引	あり	
J	30代	あり(2度目)	分娩第Ⅰ期～第Ⅳ期	経陰分娩			

表2 各カテゴリーの文脈数と該当する文脈が得られた対象者

	文脈数	人数	初の立ち会い							2度目		
			A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
【妻を支えたい】												
必要とされている	8	6	○	○	○			○		○		○
何かできることをしたい	13	7				○	○	○	○	○	○	○
【未知の世界に対する不安と恐れ】												
想像ができない	24	10	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
生々しさへの忌避感	14	7	○	○	○	○	○	○				○
【共に立ち向かう】												
大変さを知る	16	8	○	○	○		○	○	○	○	○	
世話をする	18	10	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
【男女の違いへの気づき】												
妻への想い・感謝	18	10	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
無力感	13	5		○	○		○	○	○			
女性の強さを実感する	7	4	○			○	○		○			
【成長】												
男の役割の模索・発見	28	10	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
新たな世界	11	5		○	○		○	○	○			
他者へ至る思い	8	3		○	○				○			
【影響を及ぼした要因】												
医療スタッフの対応	16	7	○		○	○	○	○		○	○	
妻からのねぎらい	9	7			○		○	○	○	○	○	○

○：そのカテゴリー・サブカテゴリーに関する文脈が得られた対象者に付与

カテゴリーに内包されたコード 203
全コード 225

おりである。『想像ができない』、『世話をする』、『妻への想い・感謝』、『男の役割の模索・発見』の4つのサブカテゴリーについては、すべての対象者の文脈が含まれており、共通して生じた気持ち・行動であったことが示唆された。

3. 立ち会い出産をした男性の気持ち

各カテゴリーとそのサブカテゴリーの解釈を以下に示すとともに、サブカテゴリーに含まれている文脈のうち、代表的な文脈を以下に示した。各文脈の後に、()を用いて、その文脈が抽出された対象者を記した。

1) 【妻を支えたい】

このカテゴリーには、『必要とされている』、『何かできることをしたい』という2つのサブカテゴリーがあり、「妊娠期」の男性の気持ちや行動を表したデータから構成されている。妊娠中の日々や出産に向けて不安になったり、苦勞をしている妻からそばにいてほしい、と言われたり、自分たちの子どもを胎内で大切に育てている妻を見て、少しでもサポートをしたいという気持ちを表している。

- 妻と一緒にいてほしい。一緒にいた方が気がラクなの

で、ということで、その意思を尊重することにしました。なので、もし、妻が立ち会わなくてもいいよ、と言っていたら、立ち会わなかったと思います。(C)

- 正直言って、それまで立ち会いはする気はなかったんですね。産後のことを色々と聞いていましたから。たとえば、セックスレスになるだとか、妻を女として見れなくなる、とか。でも、いざ、妻が妊娠をしたとなると、それどころじゃないな、と思いました。(F)
- 私もただ電話で「生まれたよ」と聞くのと、実際に立ち会うのでは全然違うだろうと思っていましたし、何ができるかわからないけど、ただ一緒にいてあげたい、そばにいて何とか支えてあげたいと思っていました。(D)

2) 【未知の世界に対する不安と恐れ】

このカテゴリーは、『想像ができない』、『生々しさへの忌避感』という2つのサブカテゴリーによって構成されている。このカテゴリーに含まれるデータの大半は「妊娠期」と「分娩期」のデータが占めている。対象者もお産に関わることになったものの、そもそも、妊娠・出産はどのように進行するのか、出産に立ち会った際に現在何が起きているのかわからずに困惑して

いる気持ちを表している。また、分娩にともなう出血や、生々しい光景に対する恐れなども含まれている。

- 途中で、スタッフが「髪の毛が見えてきました」とか、「赤ちゃんの頭が見えてきましたよ」、「肩が出てきましたよ」とか言われても、どんな状態なのかイメージがわかりませんでした。(D)
- 両親学級でDVDを見て、出産は大変だということは知ったつもりでいました。その帰り道に、車の中で妻と出産って大変だねとか話をしていましたから。でも、当事者になったら想像していたよりもはるかにすごかったです。(G)
- とにかくずっとモニターと妻の顔だけを見ていたので、子どもが出てきたことに、私だけ気が付かなかったくらいなんです。スタッフの皆さんはもちろん分かっていたし、妻もわかっていて。それくらい、モニターと顔ばかりみて、血が見えないようになり意識していたんです。ちょっと過剰だったかもしれませんが、それくらい避けたかった。(F)
- このへんが(股のあたり)がなんだか見えてしまってるんですよ。私の背が大きいというのものもあるかもしれませんが、見えてしまっ…一応、ビラビラとしたカバーみたいなのがあったのですが、実際、子供に血がついているのとかも見えてしまったんです。見ないようにはしていますが、ふと見えてしまうんです。(J)

3) 【共に立ち向かう】

このカテゴリーは、『大変さを知る』、『世話をする』という2つのサブカテゴリーによって構成され、データのほぼすべてが「分娩期」に生じた気持ちによるものである。新たな命を生み出すことの大変さに気付くとともに、妻をサポートすることを通じて、その困難に共に立ち向かおうとする気持ちを表している。

- 僕自身、出産に立ち会っている間に、感情の起伏がすごい激しかったんです。とにかく妻のつらそうな姿を見続ける、ということがとても大変でした。(G)
- 妻が産むのに、こんなに体力的・精神的に大変なんだという、苦労を実感することができたことがとてもよかったです。妊娠したら普通に産まれてくるものだと思っていたので、あの、あまりの苦しみと長さには本当に驚きました。(B)
- 私も陣痛開始から寝ずにずっと付き添っていましたし、腰をテニスボールでマッサージするなどしていたので、ヘロヘロではありました。(A)
- 陣痛室で私は妻のマッサージをしたり、子どもが出て

しまいそう、というので、出ないように(産まれてしまわないように)抑えたりしていました。(C)

4) 【男女の違いの気づき】

このカテゴリーは、『妻への想い・感謝』、『無力感』、『女性の強さを実感する』という3つのサブカテゴリーによって構成されている。このデータは「分娩期」が中心となっているが、『妻への想い・感謝』、『女性の強さを実感する』のサブカテゴリーでは、「産後」のデータも多くなっている。お産の大変さを知ること、その困難に必死に立ち向かう妻に対して湧き出る感謝の気持ちや、その一方で男性である自分はただそれを見守るかしかなく、役割や居場所を失った無力な状態を表している。

- (お産が終わり)もうへとへとになって帰宅しました。子どもが生まれた感動というよりも、とにかく妻の身体が心配でたまりませんでした。もし、立ち会わずに外で待っていて、「生まれましたよ」と言われたら、子どもが生まれたことに感動したのかもしれない。(E)
- 産後、妻にはとにかくお疲れ様、ありがとうという気持ちでいっぱいでした。(F)
- あ、何も言えないような状況。何を言っても言葉が軽くなってしまうという感じ。何か言ってあげたい。けど、何も浮かばない。どうしたらいい?何をしたらいい?でも、何も浮かばない。助けてあげたいと思うけど、何も役に立てない。ほんと、そういう状態でした。(G)
- 妻が痛みに苦しんでいる間、私としては、かわいそうだけど何もしてあげられないので、男性としての無力感を感じました。この無力感は苦しいものというよりは、悲しいに近いものでした。(C)
- 立ち会ってみて、出産は男、私には無理だな、あの痛みは耐えられないと思います。それがたえ我が子のためであって、そのための痛い思いだとしても、です。耐えられる自信ないですね。やはり女性はすごいですよ。(A)

5) 【成長】

このカテゴリーは、『男の役割の模索・発見』、『新たな世界』、『他者へ至る思い』という3つのカテゴリーによって構成されている。このカテゴリーでは「分娩直後」と「産後」の男性の気持ちを表したデータが占めている。分娩に立ち会い、お産の大変さや男女の違いを

痛感したことによって、男性だからこそできることを探そうとしたことや、分娩前と比べて視点や価値観が大きく変化したことを示している。

- 産後、妻が1か月寝たままだだったので、その間、妻の手足となって動いたり、力仕事をしたりしたのも、男性にしかできないことかもしれません。自分が父親として何ができるか、ということを考えるようになりました。(I)
- もちろん私も大変ではありましたが、私は立ち会ってよかったと思っています。立ち会って、というか、逃げなくてよかった、という気持ちかもしれません。あのとき、分娩室から逃げていたら、逃げたという負い目を感じていたかもしれません。逃げなかったこと、そういう自分であれた、いれたということ、それが本当にうれしいです。(E)
- 仕事の仕方、というか考え方も少し変わりました。出産前は家の事情で休みたとか、早退をしたい、と部下に言われても、仕事は仕事だろ、ちゃんとやってくれ、と思っていました。でも、今はその“家の事情”というのがよくわかるようになったんです。(B)

4. 立ち会い出産をした男性の気持ちに影響を及ぼした外的要因

『医療スタッフの対応』は主に分娩時の男性の気持ちに影響を及ぼし、『妻からのねぎらい』は産後の男性の気持ち、立ち会い出産全体の感想に影響を及ぼすことが示唆された。医療スタッフの男性への状況の説明が不十分である場合、男性が困惑している様子もうかがわれた。

- 僕が最初にH病院に来たときに、いきなり帝王切開の書類を渡されたことですかね。前日に検診をしていたはずだし、なんでそんなに緊急事態になっているのか、理解できませんでした。(H)
- スタッフの方には本当に感謝をしています。皆さんやはりプロの方々なので、本当に安心できました。(D)
- いったい自分がしたことがどれだけ役に立ったのか分からなかったのですが、産後に妻からいてくれるだけでもとてもよかったよ、と言ってもらえました。(F)
- 旦那の方が、いろいろと注文というか要望が出しやすい、言いやすいので、腰をさすってもらっていても、色々と言いやすかったようです。そういわれて、うれしかったですね。(J)

5. 立ち会い出産をした男性の気持ちの時間的推移

14のサブカテゴリーに含まれる文脈が「妊娠期」、「分娩期」、「娩出直後」、「産後」のどのステージにおける気持ちを表しているかを表3にまとめた。【妻を支えたい】は「妊娠期」の男性の気持ちや行動を示した文脈で構成されていた。同様に、【未知の世界に対する不安と恐れ】は主に「妊娠期」と「分娩期」、【共に立ち向かう】は「分娩期」、【男女の違いの気づき】は「分娩期」から「産後」、【成長】は「分娩直後」と「産後」の男性の気持ちや行動を示した文脈で構成されていた。これら各カテゴリーの時間的な位置付けなどを図1に示した。

表3 ステージごとの文脈数

	妊 娠 期	分 娩 期	分 娩 直 後	産 後
【妻を支えたい】				
必要とされている	8	0	0	0
何かできることをしたい	13	0	0	0
【未知の世界に対する不安と恐れ】				
想像ができない	9	14	1	0
生々しさへの忌避感	2	9	2	1
【共に立ち向かう】				
大変さを知る	0	13	1	2
世話をする	0	18	0	0
【男女の違いへの気づき】				
妻への想い・感謝	0	6	3	9
無力感	0	12	0	1
女性の強さを実感する	0	4	0	3
【成長】				
男の役割の模索・発見	0	0	5	23
新たな世界	0	0	1	10
他者へ至る思い	0	0	0	8
【影響を及ぼした要因】				
医療スタッフの対応	0	14	0	2
妻からのねぎらい	0	0	0	9

図1 出産に立ち会った男性の気持ちの時間的推移

6. 立ち会い出産の経験の有無による相違点の検討

2回目の立ち会いだった対象者3人の回答を見ると、『無力感』、『女性の強さを実感する』、『新たな世界』、『他者へ至る思い』の4つのサブカテゴリーには、立ち会い経験のある対象者のデータは含まれなかった。しかし、2回目の立ち会いでも、『想像ができない』部分は残されており、『男の役割の模索・発見』がおこなわれることが示された。

IV. 考 察

本研究によって抽出されたカテゴリーを概観すると、男性は【妻を支えたい】という一心で、出産という【未知の世界に対する不安と恐れ】に対して不安を抱えつつも、妻とともに臨んでいた。そして、妻の苦しむ姿やお産の大変さを目の当たりにしながら、妻のケア・サポートをしつつ分娩に【共に立ち向かう】。お産の大変さを実感することで、新たな命を生み出せる女性のすごさ・強さに気づくとともに、生物として男女が決定的に異なることを痛感し【男女の違いの気づき】が生じ、男性としての無力感に襲われたりもする。しかし、分娩に立ち会うことで男の役割、男親の役割とは何か、ということ在必死に考えたり、新たな価値観が芽生えたりすることで、男女の違いに対する戸惑いや無力感を乗り越え、人間的な【成長】につながることを示された。

立ち会い出産の過程において、男性の気持ちが変化すると述べている先行研究はみられるが(三上・村山・久米, 2009)、それぞれのステージにおける気持ちを具体的に示した研究は岡らの研究(2006)と、ネパールにおけるSapkotaらによる研究(2012)のほかに見当たらない。それらの研究では、分娩前に自分が分娩に立ち会う意味を模索し、陣痛が始まると男性の不安や役割が見いだせないことにより、ネガティブな感情がもっとも強くなるとされている。これらは本研究の【妻を支えたい】や、【未知の世界に対する不安と恐れ】や『無力感』がそれに当たるものと考えられる。本研究では、男性は『無力感』を分娩時だけでなく、産後にも感じることを示しており、その点は異なっている。わが国では、イクメンブームなど、産後の男性の役割は過渡期にあるとも言え、男性が男性としての役割をスムーズに見つけられるようになることで、こうした『無力感』による苦しみを予防もしくは軽減できる可能性があると考えられる。

不安や無力感といった感情や、遷延分娩や合併症が発生してしまうことは出産に立ち会った男性にとってストレスにつながりやすいことがSomers-Smithの研究によって(1999, p107)示されている。こうしたリスクへの対策は喫緊の課題である。立ち会い出産の経験があった対象者からは、『無力感』、『女性の強さを実感する』、『新たな世界』、『他者へ至る思い』の4つのサブカテゴリーに含まれるような言葉は聞かれなかったことは、こうしたリスクは特に初めて立ち会った男性に生じる可能性が高いことを示していると言える。本研究では、それに加え、医療スタッフは血液などの生々しい部分を男性に見せないように努めることや、男性にその時々状況を的確に説明をすること、その場の雰囲気にも馴染めるように配慮するといった具体的な対処方法が示唆された。また、男性自身が男親の役割を見つけることで、無力感が低減されるものと考えられ、そのために、『医療スタッフの対応』や『妻からのねぎらい』が有益であることが示された。医療スタッフや妻からの反応が男性の心理状態に影響を及ぼすことは、岡らの調査(2006)でも指摘されている。バースレビューを採り入れている施設では、男性に対してもバースレビューを実施することで、男性の【男女の違いの気づき】や【成長】につながるとともに、医療スタッフにとっても、男性への接し方に関する経験が蓄えられていくと考えられた。Lee & Schmied (2001) や、White (2007) らは、こうした取り組みに加え、妊娠期に両親学級ではなく、父親のみを対象にしたクラスの実施が必要であると述べている。

本研究は対象者10名の質的研究であるため、得られた結果が十分な一般化可能性を有するわけではない。また、状態の良くない母子は対象から除外したため、分娩が順調に経過しない場合の立ち会い出産の実態については調べられていない。しかし、本研究の結果は、出産に立ち会っている男性の気持ちの推移が示されており、実践的なケアを検討する際の一助となることが期待される。

V. 結 論

立ち会い出産に臨む男性の分娩前から産後の気持ちを分析したところ、【妻を支えたい】、【未知の世界に対する不安と恐れ】、【共に立ち向かう】、【男女の違いの気づき】、【成長】の5つのカテゴリーに整理され、時間とともに気持ちが推移していくことが示された。同時

に【立ち会い出産をした男性の気持ちに影響を及ぼした外的要因】として『医療スタッフの対応』や『妻からのねぎらい』が重要であることも示された。

謝 辞

本研究にご協力くださいました対象者の皆様、対象者のリクルートなど調査の円滑な実施をご支援くださいました東京大学の福澤利江子先生、国立成育医療研究センターの青木智子師長、調査協力施設のスタッフの皆様にご心からお礼を申し上げます。なお、本研究はJSPS科研費2392681の助成を受けて実施されました。

文 献

- 青野真歩, 高木恭子, 笹川泉, 松井訓子, 田中君子, 藤田久子他 (2005). 分娩立ち会いが立ち会う夫の感情に与える影響—立ち会い群と非立ち会い群の比較. 母性衛生, 45(4), 530-539.
- Beebe, J. (2001). *Rapid assessment process: An introduction*. California: Altamira Press.
- Hanson, S., Hunter, L.P., Bormann, J.R., & Sobo, E.J. (2009). Paternal fears of childbirth: a literature review. *J Perinat Educ*, 18(4), 12-20.
- Hildingsson, I., Cederlof, L., & Widen, S. (2011). Fathers' birth experience in relation to midwifery care. *Women Birth*, 24(3), 129-136.
- Johnson, M.P. (2002). The implications of unfulfilled expectations and perceived pressure to attend the birth on men's stress levels following birth attendance: a longitudinal study. *J Psychosom Obstet Gynaecol*, 23(3), 173-182.
- Lee, J., & Schmied, V. (2001). Involving men in antenatal

education. *British Journal of Midwifery*, 9(9), 559-561.

三上里枝子, 村山より子, 久米美代子 (2009). 立ち会い出産を通して変化する夫の気持ち. 日本ウーマンズヘルス学会誌, 8(1), 65-73.

内藤直子 (1994). 夫立ち会い出産の助産学的意義. 日本助産学会誌, 8(1), 11-22.

中島通子, 牛之濱久代 (2007). 立ち会い分娩後の夫の意識に関する研究. 母性衛生, 48(1), 82-89.

岡有美, 島袋香子, 高橋真理 (2006). 立ち会い分娩における夫の心理—分娩経過における場面ごとの振り返りを通しての分析—. 北里看護学誌, 8(1), 18-29.

Sapkota, S., Kobayashi, T., & Takase, M. (2012). Husbands' experiences of supporting their wives during childbirth in Nepal. *Midwifery*, 28(1), 45-51.

Sapkota, S., Kobayashi, T., & Takase, M. (2013). Impact on perceived postnatal support, maternal anxiety and symptoms of depression in new mothers in Nepal when their husbands provide continuous support during labour. *Midwifery*, 29(11), 1264-1271.

Somers-Smith, M.J. (1999). A place for the partner? Expectations and experiences of support during childbirth. *Midwifery*, 15(2), 101-108.

寺内友香, 野口真貴子, 久米美代子 (2010). 初産婦の夫が立ち会い出産に対して抱いていたイメージと実際の相違. 日本ウーマンズヘルス学会誌, 9(1), 67-78.

Vehvilainen-Julkunen, K., & Liukkonen, A. (1998). Fathers' experiences of childbirth. *Midwifery*, 14(1), 10-17.

White, G. (2007). You cope by breaking down in private: fathers and PTSD following childbirth. *British Journal of Midwifery*, 15(1), 39-45.